〈様式２〉埼玉県道徳教育研究推進モデル校　実績報告書

研究主題「対話的に学び合う児童の育成」

～児童も教師も楽しい道徳教育を目指して～

北本市立西小学校

１　研究主題の設定理由

本校は令和２年度から令和４年度まで、表現力の育成を目指して、「マイ・ホームタウン・スクール」というスローガンを掲げ、家庭や地域を巻き込んでの研究を進めてきたが、３年間の研究結果から本校の児童は、「自分の考えを人に伝えること」「話し合い活動を通して自分の考えを深めたり広げたりすること」が苦手であるという課題が見えてきた。

そこで本研究では、「対話」を重視し、道徳科の特質である対話的に学び合う授業を展開することで、「考え、議論する道徳」を他教科と関連付けながら実践していく。その中で、児童も教師も楽しいと感じる道徳教育および、深い学びの実現を目指し、本主題を設定した。

２　研究の仮説

⑴　対話的に学び合う授業や他教科との関連を生かした授業を実践すれば、児童も教師も楽しいと感じる道徳教育を行うことができ、児童が道徳的価値について自分事として捉え、多面的・多角的に考えることができ、よりよい道徳性の育成につながるであろう。

⑵　家庭・地域社会との連携を生かした道徳教育を全教職員で推進すれば、地域総掛かりでの一貫した道徳教育を推進できるであろう。

３　研究の経過

月	内容
４月	・共通理解と研究組織の確認 ・校内道徳ミニ講座
５月	・校内課題研究：「教材吟味」（ブロックごとに実施） 指導者：埼玉県教育局南部教育事務所学力向上推進担当指導主事 坂井　貴文　氏 北本市教育委員会学校教育課主幹兼指導主事　長谷川　典子　氏
６月	・校内道徳授業研究会 ２年３組「大すきなタブレットタイム」（彩の国道徳『未来に生きる』） 指導者：鴻巣市立箕田小学校　校長　清水　良江　氏 ３年１組「ひきがえるとろば」（学研） 指導者：帝京大学大学院教職研究科教授　藤澤　美智子　氏 ５年３組「手品師」（学研） 指導者：玉川大学教師教育リサーチセンター教職サポートルーム客員教授 藤澤　由紀夫　氏 ・全学級における道徳科の授業公開（土曜公開にて実施・保護者）

〈様式２〉埼玉県道徳教育研究推進モデル校　実績報告書

７月	・校内課題研究 （１）講義「『考え議論する道徳』を確かにする道徳科の授業づくり及び通常学級に在籍する支援を要する子供たちへの道徳科の在り方について」 「特別支援学級に在籍する支援を要する子供たちへの道徳科の在り方について及び教材吟味」 指導者：聖徳大学名誉教授　吉本　恒幸　氏 （２）演習「教材吟味」（学年ごとに実施） 指導者：【低学年】鴻巣市立箕田小学校　校長　清水　良江　氏 【中学年】帝京大学大学院教職研究科教授　藤澤　美智子　氏 【高学年】玉川大学教師教育リサーチセンター教職サポートルーム客員教授　藤澤　由紀夫　氏
８月	・「hyper-QU」１回目の分析と活用 ・小中合同研修会 ・「埼玉県道徳教育研究会夏季研修会」への参加
９月	・校内課題研究：プレ授業 指導者：埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事 亀田　央葉　氏
１１月	・埼玉県道徳教育研究推進モデル校発表（７学級授業公開） 指導講評：埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事 芳賀　一行　氏 講　　演：文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　堀田　竜次　氏
１月	・全学級における道徳科の授業公開（学校運営協議会・地域の方）
２月	・「hyper-QU」２回目及び児童アンケートの分析と活用 ・２年間の成果と次年度の課題

４　研究の内容

研究推進委員会を中心に本研究内容の企画を立案した。そして、全教職員が授業研究部に所属し、各学年でカリキュラム・マネジメント部と地域連携・調査研究部に分かれて所属し、組織的に取り組んだ。

⑴ 授業研究部の取組

①県独自の道徳教育用教材を活用した道徳教育の取組

道徳教育用教材「彩の国の道徳」、「彩の国の道徳　未来に生きる」を各学年で年間２、３回取り扱うよう計画・実施した。６月の校内授業研究会では、「大すきなタブレットタイム」（彩の国道徳『未来に生きる』）を教材として扱った。１１月の研究発表会では、「よろこびはだれに」（彩の国道徳『未来に生きる』）を教材として扱い、県内の小中学校の教員が参観した。

②全教職員による道徳教育への取組

・全教職員での教材吟味と校内授業研究会の実施

・研究協議の進め方の工夫

・「校内道徳ミニ講座」開催

道徳主任が中心となり、若手教員を対象に、教材吟味や模擬授業を取り入れた参加型のワークショップを実施した。参加者同士で道徳科の授業に関する悩みや葛藤を共有し、道徳主任等のベテラン教諭が自身の経験をもとに応答する等の取組も実施した。

・「道徳だより」の発行

・オリエンテーション資料の作成・活用
・相互授業参観とＩＣＴ機器を活用した板書共有
③ねらいに迫るための工夫
・道徳授業づくりシートの活用
・道徳科の授業のＴＴ授業
④特別支援学級における道徳教育

吉本教授の講義

聖徳大学名誉教授吉本恒幸氏を招聘し、「特別支援学級に在籍する支援を要する子供たちへの道徳科の在り方」をテーマに講義を受けた。貴重な機会であるため、市内の学校にも声をかけ、希望した教員が本校の研修に参加できるようにした。

具体的で丁寧な指導の下、特別支援学級における道徳教育についての疑問や悩みを解消することができた。通常学級の担任も特別支援学級での道徳教育についての理解が深まった。また、通常学級でも取り入れたい考えや手立てを知ることができた。

⑵ カリキュラム・マネジメント部の取組

①「重点目標別葉」の作成と実施
②校内道徳啓発掲示物の作成
③道徳教育を「見える化」した学年掲示の作成

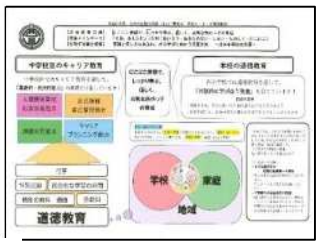
学校の教育活動全体を通して行っている道徳教育を「見える化」した増える掲示物「見つけた大切なこと」を各学年で作成し、階段の踊り場や廊下に掲示した。各学年で事前に相談し、行事や授業の中で意識して指導したものをまとめた。

④道徳教育を意識した校長講話
⑤ゲストティーチャーの活用
⑥特別支援学級における教材吟味
・「おすすめ教材」のピックアップ

⑶ 地域連携・調査研究部の取組

①各種調査の実施・考察
②全学級における道徳科の授業公開（保護者・地域）
③学年だよりに「道徳コーナー」の設置
④道徳リーフレット作成・配布

増える掲示
「見つけた大切亜もの」



道徳リーフレット

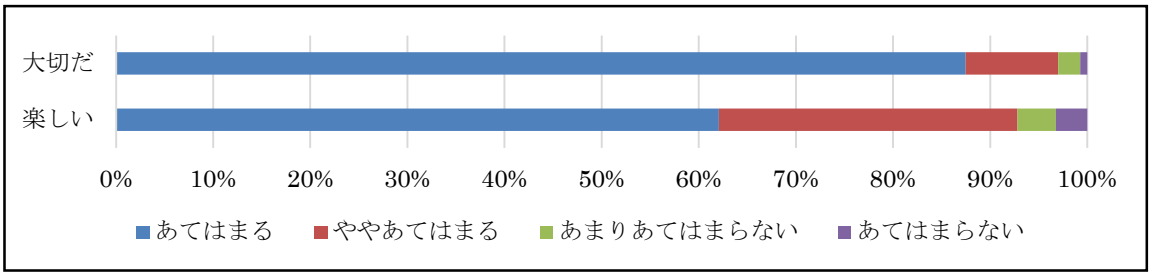
より多くの保護者や地域の方に、本校の研究や道徳教育について知ってもらえるように「道徳リーフレット」を作成し、４月の懇談会で内容を紹介しながら配布した。また、地域の方にも「よろしく集会」や学校運営協議会の際に配布し、本校の取組への協力を呼びかけた。

５　研究の成果と課題

⑴ 成果

○全校児童アンケート調査（R6.７月実施）の結果から

「道徳の授業は大切」「道徳の授業は楽しい」に対し、全体の９０％以上の児童が肯定的に回答をした。



〈様式２〉埼玉県道徳教育研究推進モデル校　実績報告書

○埼玉県学力・学習状況調査（R6 実施）の結果から

非認知能力については、４学年は、自己効力感（本校：4.1、県：3.8)、向社会性（本校：4.1、県：4.0）で県平均を上回った。５学年は、自制心が昨年度比+0.4 ポイント（R5：3.6→R6：4.0）向上した。６年生は、自己効力感が昨年度比+0.1 ポイント（R5：3.6→R6：3.7）向上した。自己効力感は、一般的には学年があがるにつれて上昇しにくい傾向にあるが、本校の６学年において向上したことは成果であると考える。

○「規律ある態度」アンケート調査（R6 実施）から

県が示す目標値８０％以上を多くの項目で達成した。

内容	質問項目		R6 小４	R6 小５	R6 小６
けじめのある生活ができる	1 時刻	①登校時刻	97.9	96.1	100
		②授業開始時刻	87.6	92.1	97.8
	2 整理整頓	③靴そろえ	82.5	85.5	85.9
		④整理整頓	78.4	78.9	71.7
礼儀正しく人と接することができる	3 あいさつ	⑤あいさつ	77.3	68.4	83.7
		⑥返事	94.8	94.7	93.5
	4 言葉遣い	⑦ていねいな言葉づかい	87.6	88.2	92.4
		⑧やさしい言葉づかい	88.7	90.8	90.2
約束やきまりを守ることができる	5 学習のきまり	⑨学習準備	86.6	85.5	83.7
		⑩話を聞き発表する	77.3	71.1	75
	6 生活のきまり	⑪集団の場での態度	91.8	85.5	88
		⑫掃除・美化活動	90.7	85.5	91.3

○hyper-QU 調査から

ソーシャルスキルの配慮の尺度の項目で８０％以上の児童が「いつもしている」と回答した。

○教職員アンケート調査から

・道徳科に対して「授業が楽しくなってきた」「自分もやってみたいという気持ちが高まった」という前向きな意見が増加した。
・教材吟味の進め方について全教職員で学びを深め、ねらいに迫るための発問や構造的な板書など様々な手法を共通理解することができたことにより、教員の道徳科のへの意欲が向上した。放課後の職員室において、道徳教育や道徳科の授業に関する話題が頻繁に出るようになった。
・教職員の道徳教育への意識が向上し、道徳科以外の教育活動においても道徳教育を意識した指導を意図的に行うようになった。
・年度当初に研究の概要を伝えるだけでなく、「道徳ミニ講座」や道徳だより、学年での板書共有等の手立てにより、共通理解を図ったことで、教員間での経験の差が少なくなった。
・グループ協議を実施し、そこから出た疑問をさらに全体で協議するという方法を取り入れたことで、全教職員で成果や課題を共有することができた。
・年間指導計画にゲストティーチャー活用を位置づけたことや動画を保存することで、ゲストティーチャーの活用が増えた。
・本研究を通して、特別支援学級における道徳科の授業実践について学ぶことができ、全教職員の理解が深まった。

⑵ 課題

・全体的に主体的・対話的な授業になっているが、振り返りにおいて自分の考えを上手く表現できない児童もいる。個別の支援に力を入れていく。
・道徳科の授業について家庭で話題にする児童が少ないことがわかった。「学年だより（道徳コーナー)」や「ワークシート（保護者記入欄)」などを活用しながら、今後も保護者を巻き込む工夫をしていく。
・規律ある態度について目標値に達しなかった項目については、今後も道徳教育を基に働きかけていきたい。